
金鱗の竜王

辰巳 結愛

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金鱗の竜王

【Nコード】

N2014I

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

皆様、お久し振り。私の名前はルフィ「ジェネル」。不死者と呼ばれる、「死なない存在」。お会いするのは…3年ぶり？それ以上だったかしら？まあとにかく、私の物語、復活って事で！今回は旅の仲間、黄金竜であるラギスの故郷、ロンジュが舞台。その長老達がまゝたム力つくのよね。それはともかく。何と、そのドラゴンの国で、「不完全な不死者」とやらが現れたとか。その元凶を倒すのが、今回のお仕事なんだけど…やっぱり相変わらず、一筋縄じゃないみたい。…また悪魔絡みかぁ。私、別に悪魔と戦うため

の傭兵じゃ無いんだけど……。とにかく、何とかするしかない、わよね？ 私達の物語に、あなたの時間を頂けたなら……。これほど嬉しい事は無いわ。お付き合い下さったら幸いです。

第0章：感激、復活、お久しぶり！（前書き）

お久しぶりです。辰巳結愛と申します。

最近、ファンフィクションを書きまくっておりますが、久方ぶりにルフィの物語を書きたくなり、投稿いたしました。

第一弾は「銀髪の悪魔」、第二弾は「蒼衣の神官」。

そして今回、「General and Priest」第三弾、「金鱗の竜王」。

皆様の貴重なお時間頂けましたら幸いです。

それでは、まずはバンクもあつたのでキャラ紹介から…
よろしく、ルフィちゃん！

第0章：感激、復活、お久し振り！

えーっと…とりあえず皆様、お久し振り？

この「General and Pleasant」シリーズ、3年近く前に会ったつきりかしら？あまりにお久し振りすぎるのと、色々皆さんの状況も変わってるみたいだから、改めて本編に入る前に、軽く自己紹介しておくわね。

まずはご挨拶。私の名は、ルフィ「ジェネル」。外見は24くらいで、旅の女傭兵。刀身も漆黒の魔剣を腰に差し、瞳の色は光の具合によって、青にも灰色にも見えるという、何とも表現しにくい色。そして、外見上の最大の特徴は、この世界では滅多にいない腰まである長い「銀髪」ってこと位かしら。…まあ、この髪のせいで、ム力つくことに「銀髪の悪魔」なんて呼ばれるんだけど…

ちなみにさつきから「外見は」って言っているのは、ひとえに私が死なない者：「不死者」と呼ばれる存在だから。元は人間だったのだけど、2000年くらい前からこんな体になっていたの。原因は今のところ不明。

だから…今、私は「不死者を殺す方法」と、「何故自分が不死者になったのか」を探す旅に出ているわ。

それから、旅の同行者が2人。

1人は青い髪に蒼い瞳の美人、ダル「プリース」。外見は25、6くらいの綺麗な女性にしか見えないんだけど、実際は男。しかも厄介なことに、こいつ、自分が「女」と勘違いされるのを極端に嫌がるのよねえ…男の矜持って奴かしら？

普段は普通の神官服を着ているけれど、その実、その若い見た目に反して、最高ランクの神官サマ。神官としての二つ名は、「海神官」と言ったらしく、海を統べる神：「華麗の神」と呼ばれるモノに

仕えているみたい。私、神様にキョーミ無いけど。

あ、そうそう。こいつも実は私と同じ「不死者」で、そうなった時期もほぼ同じらしいわ。

…ってことはこいつも2000歳超えてるのよね。

こいつの旅の目的も、私と同じ「何故自分が不死者になったのか」と言うのと…まあ、神官の性なのか、「困った人々を助けるため」みたい。

あのねえ、私、傭兵なのよ？無償奉仕なんて真っ平なんですけど！！

で、もう1人は見た目は16、7の金髪の少年、ラギス。ただ、旅をしている際の少年の姿は仮の物で、その正体は神に仕える黄金^{ゴールド}竜^{ドラゴン}。

ちよつと昔に黄金竜に協力して、海に住む魔物を倒した際に、壮絶に懷いてきた少年で、その時の気持ちを引きずっているのか、3年前にとある城で再会した際も「ルフイ様」とか呼んで、城の用心棒を辞めて（と言うか辞めさせられて？）私達の旅にくつついてきている。

だから、ラギスに関しては、特に旅の目的って物がある訳じゃないとは思っけど…強いてあげるなら、「弱きを助ける事」かしらね。

…：…うわ、そう考えたら何だかただ働きしたがる奴らばかりと旅してるって事！？

冗談じゃない！いくら私やダルが不死者とは言え、お腹も空けば眠気も襲うのよ！？

眠るのはまあ、野宿で平気だとしても（そりゃあ、ふかふかのベッドで眠れるに越した事はないんだけど）、食べるのは…そりゃあ、傭兵暦も長いから、その辺の物を使って作れなくは無いけれど…：…やっぱり、きちんとした所で食べたいと言う欲求くらいはあるの！…はっ！空腹のあまり暴走しかけたわね。

とにかく…今回こそ、「不死者になった理由」が分かるような進展がありますように……

そう思いながら、私は…と言うか私達3人は、次なる町へと向かっておりました。

そんな訳で、お久しぶりのこの物語…開幕！

第1章：到着、苛々、依頼の内容

活気にあふれ、穏やかな表情で街中を行き交う人々。

この街の警備だろうか、所々甲冑の騎士達を見かけるが、これと言って威張っている様子は無い。街の人も気軽に彼らに声をかけ、楽しそうに談笑している。

山に囲まれた地形ではあるものの、随分と開かれた、穏やかな感じの街である。

…にもかかわらず。

今の私は非常に不愉快極まりない状態である。

何故かって？

それは…

「何をしに来た、銀髪の悪魔よ。」

「まさか、100年前の出来事くらいで、我々に認められたと思っている訳ではあるまいな？」

「不死者など…汚らわしい。」

「神の意に反する者が、この国にいるなど…断じて否。」

この国に入ると同時に、私…ルフィ「ジェルとダル」プリース、そしてラギスの3人はこの国の中央に位置する建物…と言うか神殿…？に通され、そこに偉そうに座っていた、いかにも「長老」のような爺様方にネチネチと言われているのである。

しかもこいつら、物凄い上からこつち見下してるし。位置的にも言い方的にも。

「あの…」

「ラギス、そなたは黙っておれ。」

「は…はい…。」

この国に私達を連れてきた張本人…ラギスが、私の弁護でもしてくれようとしたのだろうが、その言葉すらも止められてしまう。

竜王国、ロンジユ。その名の通り、竜族の竜族による竜族のため

の国家である。

一応、人間社会に溶け込むために、街並みは普通の町と同じだが、竜族しか住んでいないため、「家」と呼べるような建物は一切無い。
…だって、竜族って森の中や山の中で寝てる生き物だし。

まあ、それはともかく。

以前もちらつと言ったと思うが、竜族は基本的に、神に近い立場にあるとされている。

人間がそう思っている節もあるけど、何より本人達がそう公言して憚らないんだから始末が悪い。

人間に関してはその辺の塵芥程度にしか思っていないようだけど、私やダルのような不死者に対しては、「穢れた物」という扱いをするため、あまり係わり合いになりたがらない。

…そう、「物」扱いなのよ、「者」じゃなくて。

私は100年ほど前、この国に現れた魔物を退治した事がある。

その時、竜族の中でもある程度は認められたと思ってたんだけど…ラギス達、黄金竜族…その名の通り、金色の体を持つ竜達は私の事を認めているのだが、ここにいる長老さん達…古竜族と呼ばれる、竜族の中でも割と長寿で、彼らの始祖とされる存在は、未だに認めていないらしい。

ダルはまだ、「華麗の神」に仕える高位神官だからあまり言わないみたいだけど…私のように傭兵、しかもかつて「銀髪の悪魔」なんて言う二つ名を持っている者に対しては、とことん辛辣な言葉をかけてくる。

…ああ、殴り飛ばしたい…。

好きで不死者になった訳でもないのに、ここまで言われるのは…正直言ってかなり腹が立つ。

しかも、あえて言うなら、こいつら全員私より年下だからね！年上を敬うのを常とする竜族が、思いつきり年上の私に向かってこの口のききよう…

以前にこの国に来た時も思ったけど、こいつら私の事を悪魔と同

じかそれ以下にしか見てないでしょう。

「…出て行つて欲しいならそう言つて頂けます？こちらとしても頭の固い古竜族のガキの愚痴を聞いてやれるほどの余裕は無いので。」

にこやかな笑顔で、上の方にいるじーさん達に向かつて言う私。

これでも、極力丁寧な物言いしてるつもりなんだけど…隣にいるダルが私の顔見てドン引きしているのは何故？

ラギスはひたすらオロオロしてるし。

「ふん…本当なら今すぐにでもそうしてもらいたい所なのだな。」

「貴様がここに来たのも何かの縁…」

「あ、私一応傭兵なんで。ただ働きは絶対しません。」

なにやら厄介事を押し付けられそうな予感がし、とりあえず先手を打つておく。

いかに相手が竜族とは言え、貰う物は貰つとかなないと割に合わないわよ。

「穢れた考え方だな。」

「現実的と言つて頂きたいですね。世間知らずの子供じゃあるまいし、もう少し世の中の仕組みをご覧になった方が良いでしょうよ、ラギスみたいに。」

ああ、本気で腹立つ。対価を求める事のどこが穢れているのやら。生きていくのに…もっと言うなら食べていくのに必要だから要求するんじゃない。

…つて、食欲という概念の存在しないこいつらにそんな事を言うてもしょうがないのはわかってるんだけど…

「やはり、銀髪の悪魔などにやらせるべき仕事ではないのではないのか？」

「いや、穢れたものには穢れたものを。我々が穢れる必要はどこにも無い。」

…待て。それはつまりあれですか？私、捨石つて事ですか？

………冗談ではない。

「ラギス、あなたの生まれ故郷だと分かつてはいるけど、やっぱり

私、長老という名の若造共が幅利かせている間はこの国の事が好きになれそうに無いわ。」

「ル、ルフィ様!？」

ラギスが悲しそうに声をかけるけど、私の知った事では無い。

これ以上ここにいるのは時間の無駄、である。

そもそも私は、「何で私が不死者になったのか」と言う事を知るために旅をしているのであって、年取ったドラゴンに嫌味を言われる為では、断じてない。

「銀髪の悪魔よ。」

「一応、忠告しておきます。次にその名で呼んだら殺す。」

私を呼び止めたドラゴンの爺さんを睨みつけつつ、かなり殺意のこもった声で返す。

自分でも、大人気ないとは思うけど…本当に嫌いなよ、その呼び名。

こっちは人間だって言うのに、悪魔扱いなんて不愉快極まりない。「不死者には大きく分けて2種類ある…」という事実を知っているか？」

私の殺意は無視か？そのまま話を進められても返答に困るんですけど。

「……知らないわね。」

「そうか。ではその蒼き神官よ、そなたは知っているか？」

「…神に愛されたが故に不死者になった者と、魔王に好かれたが故に不死者になった者…の事かな？」

急に振られたにもかかわらず、ダルは一瞬考えた後にそう答えた。って言うか、そんな分け方があったのね。知らなかったわ。

「そのような振り分け方もある。だが…」

「僕達竜族では、不死者はこう分けているんです。『死なない者』と『死ねない者』に。」

「…何が違うんだ？」

爺ドラゴンの言葉を継ぐように言ったらラギスに、ダルが聞き返す。

確かに、何が違うのか今一つ分からない。

「死なない」と「死ねない」は同じでは無いの？

「ルフィ様やダルさんのように、ダメージを与られても人の姿を保っていられる不死者を『死なない者』。それに対して、攻撃を受けたらそれすらも戻らないのが『死ねない者』。」

……？

「苦痛も永遠に味わうのが、『死ねない者』…と言う事か？」

「はい。腕を斬られたら斬られたまま。首を落とされたら首だけのまま。極端な話、細切れにされた状態でも、その姿のまま、なお存在し続ける者です。」

……ヤバイ、ちよつとグロくなつた状態を想像しちゃつた…。

…私やダルなどは、斬られよーが何されよーが、暫く時間が経てば元の状態に戻る。ある意味、為政者達の望む「完璧な不老不死」って言う奴ね。

だけどこの話の流れで行くならば、「死ねない者」と呼ばれる類の不死者は、肉片になつても痛みだけ感じて、永遠に元には戻らないって事らしい。

リビングデッド、何て呼ばれるものも、ひよつとするとこの類かも。痛覚無い分、あいつらの方がマシかもしれないけど。

うーん…そういう意味じゃあ、私って恵まれてる方？ いや、もちろん不死者である事は嫌で嫌で仕方ないんだけどさ。

って、何で今こんな話になつてる訳？ 凄く嫌な予感がするんだけど。

「最近、この国に『死ねぬ者』が出て、な。その元凶を潰せ。」

…命令形か、この爺。

剣の柄に手をかけ、思わず斬りつけそうになるのをぐつと堪え…私はラギスとダルを交互に見る。

ラギスの方は何かもおすつこい驚いてるし、ダルは何考えてるのかわかんない笑顔を浮かべてるし。

「…ここで、断つたら？」

「ここで捕らえ、二度と世に出られぬようにするのみ。」

「出来ると思う？」

実際、この数の古竜族相手に逃げ切れるかと聞かれると微妙なのだが…手段を選ばなければ、こいつらから逃げ切る自信はある。

まあ、要はハツタリなんだけど…どうやら今回は効いたみたい。

長老の1人は軽く溜息を吐くと…

「正直、出来ぬだろう。」

「貴様がその気になれば、我らを瞬時に殺す事など容易いはず。」

「…しかし、貴様は断らない。」

長老達の連続台詞に、私の眉がきゅうつと寄っていくのがわかった。

もう1回言うわ。凄く…すっごく嫌な予感がするんですけど。

「望むのであれば、此度の報酬…貴様を『死なぬ者』に変えたやも知れぬ存在の名、教えてやっても良い。」

……………何ですと？

ああ、でも不確実な情報のためにこいつらに加担するのも…いやいや、でも何も無いよりは…やっぱりこいつらの手伝いは…

そんな風にぐるぐる考えている最中、長老の1人が私の足元に何か…掌に乗るサイズの宝珠らしき物を放り投げた。

「…何？」

「足りなければ、それを穢れの報酬とするが良い。」

「こ、これって…魔封石…!？」

「ブリュ製の、高純度の物だ。品質も保証されておる。」

ラギスの驚きの声に、それを投げた長老が苦々しげに答える。

…魔封石と言えば、「魔力を封じた石」の事なんだけど、宝石なんかより遥かに希少価値の高い代物。

この大きさなら、その筋に売れば、それなりの値段を吹っ掛けられそうね。隣で物欲しそうに見ているダルとかダルとか、あとダルとか。

口元にニヤリと歪んだ笑みを浮かべて、私はそれを拾うと…

「良いでしょう。その依頼…お受けいたします。」

……ああ、悲しいかな傭兵の性。どんなに嫌な相手にも、報酬をもらえるなら何だっしてしまふなんて。

結局、この古竜族の連中に乗せられたような気もするけど…元凶、ね。また、悪魔絡みなんだろうなあ……。どうか今回は、それ程危険な奴が出てきませんように。

第2章：絶叫、上空、これ暴走！？

…さて、受けたのは良いんだけど…そもそも、「元凶を消せ」って言われたって、どこにいるかも分からないような奴を探すって…正直、無理じゃない？

何て思っけていても仕方ないし…それに、どうやら私はトラブルを呼び込む体質のようだし、その辺を歩いていけばいつかは襲って来てくれるかな…とか悠長な事を考えていた私の袖を、ラギスがぐいと引っ張った。

「あの…ご気分を害されたなら、申し訳ありません、ルフイ様。」

「ああ、あいつら？昔っからああだったじゃない。それに、ラギスが謝る様な事じゃないでしょ。」

心底申し訳無さそうな彼に、私はいつも通りの顔で答えると、彼はどこかほっとしたような表情に戻る。

そりゃあ、ム力つかなかったって言ったら大嘘になるけど、古竜族の連中が不死者を快く思っていないのは事実だし、私だって普通の人間だったら、不死者なんて不気味だと思って石でも投げてたに違いない。

そもそもあんな連中の言った事に、ラギスが傷つく謂れなんてこれっぽっちも無い。

「あんたは、堂々としてれば良いのよ。」

「でも、僕…次期竜王なのに、長老達を抑える事が出来なくて…」

「だから、あんたのせいじゃ…」

………待て。今、ラギス、何と…？

確か…「次期竜王」とか…そう言ってなかった？

「ラギス、君…竜王候補だったのか…！？」

「あ、はい。一応。……申し上げていませんでしたっけ？」

「聞いてない。聞いていないわよそんな事。」

竜王とは、読んで字の如く竜族の王。全ての竜を取りまとめ、戦いの際は最前線に出る勇敢さと、分け隔てなく仲間と接する事のできる寛大さ、そして守る事が出来る聡明さが必要とされる存在。

その候補ともなると、それなりにドラゴン族に認められていなければならぬはず。

しかも、ラギスの口ぶりでは、既に彼は竜王「候補」ではなく、竜王になるのが「確定」している存在と言う事になる。

……ありえない。言ってもラギスはドラゴンの中でもまだ若い部類に入るし、悪魔を倒すためなら人間の城の一つや二つは平気で壊すし、人に「若造」とか「小僧」と呼ばれたら切れると言う、寛大とは程遠い性格だし！

…大丈夫なのか竜族、こんなのを王にして。

「まあ、竜王って言っても、大した事ないんです！要は単なるまとめ役、竜の代表ってだけですから。」

「いやいや、竜王と言えば、神に最も近いドラゴンだろう？大した事あるって！」

へらつと笑いながら緊張感無く言うラギスに対し、ダルが慌てたように物凄い勢いでツツコミを入れてくれる。擬音としては、「ずびっ」って感じかしら。裏手でラギスの胸の部分を叩いているあたり、かなり芸人根性が伺えるわね。

とか思っていたその刹那。誰か、苦しげな男の絶叫が、私の耳に届いた。

森の奥、だけど今いるところからはさほど遠くない位置。

ここが普通の街道だと言うのなら、「ああ、また誰かが野党に襲われてるな、可哀想に」くらいにしか思わないのだが、ここはドラゴン達が住まう国。

そこでこんな絶叫が聞こえると言う事は…何かとんでもない事が起きているに他ならない。

「今の…ただ事じゃありませんよ！」

「言われなくてもわかってる！」

ラギスの言葉に頷きつつ、既に私は声のした方向に向かって駆け出している。

とは言え、慣れない国の、始めてくるような森の中。私が先頭に立った所で、多分迷うのがオチだと思うんだけど…

とか思った瞬間、後ろで走っていたラギスの体が淡く光り、その姿を、見慣れた少年の物から本来の姿…美しい金色の鱗に覆われたドラゴンの物へと変える。

『ルフィ様、ダルさん！乗って下さい！！』

いつもの子供っぽい印象を抱かせる声とは、また異なる…だけどはつきりとラギスだと確信も出来る不思議な声でそう言つと、彼は私達の前にその背を向ける。

…成程、地上から探すより、上空から探そうって訳ね。

「ラギス、ここはあんたに任せるわ。」

それだけ言つと、私は遠慮なくラギスの背にその身を預け、その後を追うようにダルも彼の背に跨る。

『それでは御2人とも、僕の首にしっかりと掴まっていて下さいね…！』

その言葉と同時に、ふわりと竜と化したラギスの巨体が、その姿に見合わぬ程軽やかに浮き上がる。

人間2人がその背に乗っていると言つのに、特に苦に感じている様子も無い。

バサリとその羽を羽ばたかせ、悠然と宙へと浮き上がったかと思うと、今度は途方も無いスピードで周囲を旋回し始めた。

……ちよちよちよ、ちよつと！？いくらなんでも飛ばしすぎよ！しっかりと掴まってたって、気を抜いたら間違いなく振り落とされそうなスピード。

抗議の声を上げたくとも、下手に口を開けば舌を噛みそうになる。それに、どの道この風圧じゃ、声なんて出ないだろう。

後ろじゃダルが、さっき聞こえてきた悲鳴に劣らない、絶叫に近い悲鳴を上げてるし。

風圧のせいで首が動かせないから、顔までは確認できないんだけど。

『見つけた…あそこです!』

どうやら声の主を見つけたらしい。ラギスは嬉しそうにそう言々と、スピードを落とさずに大地に向かって急降下。

ぶつかる直前にそのスピードを落とし、彼は先程とは比べ物にならない程ゆっくりとしたスピードで大地に降り立った。

…もう二度と、竜の背中に乗るのはやめよう。うん。

そう心に誓いながら、私はいつの間にもやらの人間の姿で、嬉々とした表情を浮かべているラギスと、私の横でぐったりとした表情のダルを、交互に見比べたのであった。

第3章：悲鳴、絶叫、阿鼻叫喚

乗り物…と言う表現が、ドラゴンに当てはまるのかは分からないけど、とにかく「乗り物酔い」から多少回復した頃に。

私達はようやく、悲鳴の元に辿り着いた。

そして…その声の主を見た時、思わず私は一歩、その凄惨な光景に後退ってしまった。

これでも、2000年生きているし、傭兵なんだから凄惨な場面と言うのは、嫌と言うほど見てきたつもりだった。

だけど…甘かった。

私が今見ているモノは、そんな出来事などちやちに思えてしまうくらい…「凄惨」なものだ。

鎖に繋がれた、それは。

悲鳴を上げすぎた顔は、もはやその形に固定されている。

首から腰までの部分からは、肉色の蛇のようなものが生え出し、その体を食いちぎる。時々何かを噛み砕くような、バリバリと言う嫌な音も聞こえる。腰から下は既に食われつくしたのだろう、少なくとも私の視界に入る場所には無い。

それは、漆黒の鱗を持った竜族。

首と前足…人間で言うなら両腕にあたる部分には、鎖が巻かれており、暴れたが故に擦れて真っ赤になっている。

普通なら死んでしまいそうなものの、そのドラゴンはひたすらに悲鳴を上げ続けている。

私達が目の前にいると、認識してるかどうかも怪しい…濁った瞳を、空に向けて。

「殺してくれええっ！」

心の底からの懇願。

通常、竜族は物凄くプライドの高い生き物とされており、人間に助力を請うどころか、人前で泣くことすらないと言われている。

まして、目の前で悶え、苦しんでいるのは漆黒の鱗を持っている。と言う事は、戦闘力では右に出る竜は無いとされる、ダークドラゴンと考えられる。その戦闘力に比例して、プライドも超がつくほど高い事で有名な種族。

それが…

「その人間！あつが、ぐああああつ！た、頼む、俺を、俺を殺してくれ！」

「あ……」

瞳に涙を浮かべ、地に頭をこすり付けるようにして、相手は悲鳴混じりに私達に乞う。

……殺してくれ、と。

「殺してくれ、頼む、今すぐに！俺をこの苦しみから解放してくれええええつ！」

「…間違いありません。この人は、『死ねず』の不死者です。」

むせび泣くその漆黒の竜に哀れみの視線を向けながら、どこか感情を殺したようにラギスは言う。

その拳が、肩が、細かく震えているのを、私は見逃さなかった。

それは目の前にいる竜を、こんな目に遭わせた者に対する怒りなのか、それとも…救えない事への悲しみか。

或いはその両方なのかもしれない。どちらにしろ、殺しきれない感情が、彼の中で渦巻いているのは確からしい。

「これが…死ねない者……」

口元を押さえ、呻くように吐き出されるダルという言葉。

いかに、私達が恵まれた「不死者」であるかを痛感すると同時に、なぜこんな事になったのかと考え込んでしまう。

…自分で不死の研究をしてこうなった？

いいや、相手がドラゴンである以上、穢れの象徴である「不死の研究」をするとは思えない。百歩譲っていたとしても、自身の体を喰らうような不死の研究など、誰がする？

では、誰かにこんな体にされたか？

それしか考えられないが、そうになると相手が限定されてくる。曲がりなりにも戦闘力に特化した漆黒竜だ、それをこんな目に遭わせられる者と言えば…かなりランクの高い悪魔か…考えたくは無いが、彼と同じ竜族か。

ラギスの様に、不死者に懐く竜もいるのだ、前言を翻すようだが、「不死の研究」をする竜がいけないとは限らない。

「…『死ねず』を殺す方法は、2つ。1つはこの体にした者を倒す事。もう1つは、この体にかけられた呪を上回る力で『殺す』事。」

「…元に戻す方法は、無いの？」
「ありません。」

私の問いに、ラギスは感情を殺して首を横に振る。

それもそうか。私達、ラギスの言う所の「死なず」ですら、元に戻る方法は見つかっていない…つまり、「無い」と言うのに。同じ不死者である彼らが、元に戻るはずも無いのだ。

…五体満足な、普通の竜に戻る事など。

「まして、ここまでの強力な呪…後者の方法は、ほぼ無理だと考えられます。」

「ダルの魔法でも？」

「…無理だ。見たところ、これはデビルクラスの悪魔による呪…それに、ドラゴンの持つ生命力が作用している、所謂『併せ技』状態だ。いくら僕でも、神聖魔法と暗黒魔法を同時に使う事はできない。」

つまり…相当に複雑な状態が、目の前で苦しんでいる漆黒竜の体では起こっていて…今すぐに殺す事は、出来ないと言う訳か。

そんな悔しい思いが、胸の内を占めかけた時だった。

背後から唐突に、声が上がったのは。

「ルフィ姐さんの混沌魔法でなら、一撃でそいつを殺せるぜ？」

そう軽く放たれた言葉は、私の後ろから聞こえてきた。

いくら目の前の光景に驚いていたからって、声をかけられるまで背後の気配に気付けないなんて…！

思い、剣を抜き払いながら身構えた私の視界に……見覚えのある影が、軽く手を上げるのが、見えた…

第4章：再会、脅威、魔王の分身！

「よ。」

…一瞬。

私は自分の目を疑った。

軽く右手を上げ、にこやかに笑いながらこちらに来る1人の青年。年は、16、7くらいだろうか。

赤い瞳、赤に近い茶髪、腰には小振りのナイフ、背には赤い柄の剣。

戦士、という職業らしい格好をしているが、私が固まった理由はそんな事じゃない。

…見覚えが、あった。この戦士の青年に。

「ルフィ…様？」

私の、異常なまでの驚きを察したのか、不思議そうな表情でラギスが私の顔を覗き込む。

だけど、そんな事を気にしている場合では無い。

ダルも、その青年を見てパクパクと口を開いたり閉じたりしている。

後ろのダークドラゴンの絶叫など、もはや私の耳には入っていない。とにかく、それくらい目の前の存在がショックなのだ。

そんな私の顔が面白いのか、現れた青年はにやりと笑うと、1歩、こちらに向かって近付いて来た。

特に殺気を放っている訳でもないのに、私は相手が近付くのと同じ距離だけ、気圧されたように後ろに下がる。

…何で、こいつがここに…！？

「やだなあ、ルフィ姐さん。そんな顔されると、苛めたくなってきたやうじゃん。」

悪戯の見つかった少年のような表情で、青年は更に1歩近付く。その刹那、反射的に私は腰の剣を抜き払い、相手を睨みつけなが

ら対峙した。

…忘れるはずも無い。
忘れられる訳が無い。

この、男は……

「何で…こんなトコにいるのよ…」

口の中が乾いて上手く喋る事など出来ない。

素直に認めよう、私は目の前の青年に恐怖している。

だって…だって、この男は……

「ディール。紅玉の魔王の、分身。」

ディール。私がダルと出会った際、一時期共に旅をしてきた渡りの「戦士」。

その正体は、三大魔王の1人、「紅玉の魔王」と呼ばれる存在の一部…分身だった。

それほど昔の話では無い。今でも良く覚えている。「赤い羽根の鳥」が一般的に知られる「紅玉の魔王」の姿だが、実際は何にでもなれるらしい。

今、目の前にいるのは…私とダルが戦い、そして辛くも勝利した、「魔王の分身」と同じ姿をしている。これで忘れていたら、相当おめでたい頭だわね。私、あの戦いで5、6回くらい「死んで」いるからね。

「いやあ、覚えててくれて嬉しいぜ。」

心底嬉しそうにそう言うと、ディールは今まで開いていた距離を一気に縮め、私の剣が届くか届かないかの場所に立つ。

流石に、こちらの間合いは見切られているか…

いつでも攻撃できるように身構えながら、私は相手が仕掛けてくるのを待つ。

魔王相手にこちらから仕掛けるなど愚の骨頂。それは以前の戦いで充分把握しているつもり。

そんな風に殺気立つ私に気付いているのかいないのか、ディール

は武器を抜くでもなく、楽しそうに笑うと…一言、言葉を放つ。

「…って言っても、俺、ルフィ姐さんに倒された欠片とは違うんだけどさ。」

「何ですって？」

「『魔王の欠片』は、元が同じなせいか、互いに情報を共有できるんだよ。俺は、ルフィ姐さんが会った『デイル』と、似て非なる存在。」

訝る私に説明してくれるデイル。

…確かに、あの時私とダルは、確実にデイル…魔王の分身を倒した。目の前にいる「デイル」が、私達が倒した「デイル」とは別個体だという事も納得はいく。

しかしそうなると問題は…「何故、私達の前に現れたか」。

もしもまた、こいつと戦う事になったなら…私は、勝てるのだろうか。

あの時は、不意打ちに近い状態で勝利した。こいつが情報を共有できるというのなら、私が第三の魔法…「混沌魔法」が扱えることも、ダルが不死者だと言う事も知っているはず。

正直、何の慢心もない魔王相手に勝てるとはこれっぽちも思えない。

「…で？まさか…私とダルが倒したデイルの、敵討ちとか言うんじゃないでしょうね？」

極力軽い口調で言ったものの、もしもここで「うん、そう。」とか言われよう物なら…悪いが私はダルとラギスを見捨ててでも全力で逃げる。

しかしデイルはそんな私の言葉に、きよとした表情になり…ぶんぶんと首を横に振った。

「俺が？無い無い！むしろ俺、ルフィ姐さん達に興味が湧いちゃった。」

「……はあ！？」

思わず素っ頓狂な声をあげる私に、デイルは魔王とは思えぬ爽

やかな笑顔を私達に向け…

「竜王だけじゃなく、魔王もお供につて、どうよ?」

「心の底からお断りよ! って言うか、良くまあ私なんかに興味が持てるもんね…」

「情報は共有できるけど、感情までは共有してないからね。俺は、ルフィ姐さんとダル兄さんを、面白いと思った。だから付いていこうと思った。ほら、論理的!」

どこがよ。

と突っ込みたい気持ちをグツと堪え、私はデイルの姿を、もう一度まじまじと見つめる。

…私の知る、デイルそのもの。違うのは背に差している剣くらいのものだろう。

ひよっとすると、わざと似せているのかもしれないけど…こいつから感じる、異様な雰囲気は、私達の知るデイル: 「紅玉の魔王」の分身と同じ。

「少なくとも、『俺』は2人の敵にはならないぜ?」

「信用できないわね。」

「だろうな。俺ならそこで信用はしない。端から信用されるとは思ってねーし。」

からからと笑いながら、彼はあまり気分を害した様子も無くそう言つと、両手をひよいと上げ、敵意が無いと意思表示する。

…まあ、魔王の分身が両手を上げたからと言って、敵意がないと判断するには早計なんだけど…少なくとも、殺気や害意は感じられない。

こいつの登場、私はどう思えばいいんだろうか……

第5章：竜王、魔王、最悪の一行

「ルフィ様、こいつは…」

はうあつ！ ついついラギスの存在忘れて、目の前の存在に見入ってしまった！

けど…この状況、不味くない？

言ってもラギスは次期竜王、そしてデイルは魔王の分身。

水と油のようなこの2人がであって、和やかな雰囲気になるはず無いじゃない！

さあつと顔から血の気が引く私に気付いているのかどうなのか、物凄く陰のある顔で、ラギスはデイルを睨みつけている。

睨まれてる方はと言うと…対照的に、どこか楽しんでいるようにも見える笑顔を浮かべている。

「こいつからは、物凄い穢れを感じます。この国に似つかわしくない…瘴気を。」

「おつと次期竜王殿。口の聞き方には気をつけた方が良いでしょう。」

デイルはそう言うと同時に、笑顔のまま…とてつもない殺気をラギスに向ける。

私も傭兵と言う職業柄、指向性があるとは言え、殺気には敏感だ。

…普通の人間なら、向けられただけで心臓が止まりそうなほど、強烈な殺気。その中を、ラギスは特に気にした様子も無く…ただ、苦々しげに吐き捨てるように呟きを落とす。

「…やはり、魔王なんですね。汚らわしい。」

ケツと言う表現が似合いそうな、そんな不機嫌モロ出しの顔で、ラギスはギロリとデイルを睨む。

デイルの方も、それに何かカチンと来るものがあつたのか、笑みを消し、ラギスと同じ様な…それこそ、双子じゃないかと思えるくらいそっくりな、不機嫌そのものの顔をこちらに向け…

「うつわ。ム力つくわあ。ルフィ姐さん、こいつ殺して良い？」

「ルフィ様、こいつ、抹殺しても？」

おいおいおいおい！何を物騒な事を同時に言ってやがるのよこの2人は！

そりやあまあ、確かに竜族と魔王って、相容れない存在なのかも知れないけど…こんなトコで戦われたら、私止められないわよ。

って言うか逃げるからね！？

巻き込まれたく無いもん、そんな派手そうな戦い！

心の中でのみツツコミつつ、私はズキズキと痛むこめかみを押さえながら、2人に向かってできるだけ呆れた口調と表情を作り…

「ダメだから。って言うかラギス、相手魔王だし。簡単に殺せる気でいたら大間違いだから。」

「分かってます。相打ち覚悟で殺します。」

「やめなさいって。迷惑がかかるから。」

主に私とダルに。

そんな本音を飲み込む私。だけど、どうやらダルにはその本音が伝わったらしい。彼もまた、私と同じ様な…物凄く複雑そうな表情で、こくこくと頷いていた。

そんな中、ラギスは唐突にはっとしたような表情になり、私達の後ろにいるダークドラゴンとデイルを交互に見やり…

「…まさか！この『死なず』はお前が！？」

あ、その可能性は高いわ。

何しろ相手をこんな「不死」にできる存在とえば…三大神または三大魔王、そしてそれに次ぐ力を持つ者…神に近ければ「エンジェル」とか呼ばれるし、魔王に近ければ「デビル」とか呼ばれる。そして…デイルには、相手を不死にしまっただけの力がある。普通に考えれば、こいつが犯人って事よね。うわ勝てる気がしない。

…と、思っただけ…

「『死なず』…？」

何の事か、本当に分からなかったらしい。彼は年相応に見える仕

草で、軽く首を傾げ… 私達の後ろの存在が、ようやく目に入ったらしい。

ぽんと手を打つと、納得したように1つ頷き…

「ああ、そこにいる絶賛大絶叫中のダークドラゴン？ 違う違う。俺、こんな不完全な不死を与える程、飢えてないし退屈もして無いもん。」

「なら、他に誰がいるって言うんだ？ 魔王以外にこんな事が出来るのは…」

「デビルだけ、です。」

警戒態勢を通り越し、既に何故か戦闘態勢に入っているダルとラギス。

… ちょっと、やめてよ？ 私、流石にここで戦う気無いからね？

って言うか、何でこの2人こんなにやる気満々なのよ。あー、頭痛い…

酷くなる頭痛を堪えつつも、とりあえずいつでも逃げられるように体勢を整えた瞬間、デイルはにっこりと… それはもう、「邪心の欠片ありません」って顔で笑う。

… 相手の正体を知っているだけに、あまりにも怪しすぎるんだけど…

「あ… そう言えば、俺、ここに来る前に見たわ、デビル。『こんなトコに面白い奴がいるな』って思ったもん。あれは完全に『黄玉』の部下だな。」

をい。

「何故分かる…」

「ルフィ姐さん、俺を誰だと思ってるんだよ？ 曲がりなりにも紅玉の魔王の欠片、デイル… ルビィだぜ？」

ニヤリ、と小悪党な笑みを浮かべ、私の力ないツツコミにデイルはさも当然のように言い放った。

… って言うか… 魔王の癖に、小悪党な笑みってどうなのよ。

第6章：神聖、暗黒、混沌魔法

「さてと、そんなことよりルフィ姐さん。」

例の小悪党な笑顔のまま、ディールは軽やかな足取りで一步、私に近付く。

ああ、何でだろう。物凄く…何かを企んでる感がひしひしとするのに、目が離せないなんて。

思う私をよそに、彼はずっと後ろで絶叫しているダークドラゴンを指差し…

「あいつ、殺してやらなくて良いのか？」

「あ……」

確か、こいつはその姿を見せた時、こう言った。

…私が唯一使える魔法…聖にも魔にも属さぬ、第三の魔法と呼ばれる、混沌魔法を使えば、一撃でこのドラゴンを「殺せる」と。

自身の生命力と、デビルによる呪いの力で、「死ねない体」となった、この漆黒の竜を。

「俺は別に良いんだけどさ。流石に煩いし。それに…『黄玉』は、協定違反を犯している。」

「協定つて、何だ？」

不思議そうなダルの問いに、ディールの表情が真剣なものになる。

魔王と言うより、これから魔物退治に向かう、勇者のような印象を受けてしまうのは、ひとえにその整った…ある意味整いすぎた顔立ちのせいだろうか。

「三大魔王の間では、ちょっとした約束事がある。その内の1つが…支配する領域。」

ぴっと人差し指を立て、まるで子供に教えるような仕草で、ディールはそのまま言葉を続ける。

…子供扱いってのは正直ムカつくけど。

「支配領域…『孤高の神』と『紅玉の魔王』は天空を、『灼熱の神』と『黄玉の魔王』は地上を、そして『華麗の神』と『蒼玉の魔王』は海原を支配する…と言う奴だな。」

「そ。俺達『魔王』が混乱させるべきは、それぞれの領域に関わる者と、自らに刃を向けた者だけと、取り決められている。」

ラギスの言葉に頷きつつ、ディールは出来るだけ私にも分かるように説明してくれている…らしい。

正直、神話の類に物凄く疎い私としては、ついていくので精一杯なのだが…

要は、ディールが攻撃して良いのは、空を舞う者と、以前の私とダルのように、自身の邪魔をした者と言う訳か。魔王にも厄介な制限があるのね…

「さて、ここでルフィ姐さんに問題。」

「…何？」

「ドラゴンは、どこに属する生き物とされているでしょうか。制限時間は、10秒！」

「は!？」

竜族が属する場所!? そりゃあ、地上じゃ…

あ、いや待てよ? でも竜族の移動手段は主に飛行よね。って事は空中?

うーん…

「ブッブー時間切れ」。罰ゲームは、後で混沌魔法あのドラゴンをぶち殺す事ね。」

「…随分と楽しそうに言うじゃないの。あれ、結構しんどいのよ?」

「だろうね。多分、人間が混沌魔法を使おうと思ったら、命と引き換えになるだろう代物だからね。」

…そんな物、使ってたのね、私。道理で使った後、随分と疲労する訳だわ。

「それはともかく、正解は…地上と天空、両方に属すって考えられてるんだ。」

「…確かに、僕達は地上、天空、どちらも活動の拠点にしていますから、そう判断されるのでしょうか…」

「そう言った、『両方に属する生き物』に関しては、特別ルールがある。」

「ひょっとして…第三者…この場合、『蒼玉の魔王』しか手が出せない、とでも言うのか？」

「ダル兄さん、正解。」

……ごめん、ちょっと展開が早すぎてついていけなかったんだけど…要するに、竜族は地上でも天空でも活動しているから、魔王的に、「紅玉」と「黄玉」のどちらが手を出すかもめる事になる。

そうなるくらいなら、いつそ何の関係も無い「蒼玉」に任せてしまえ…って事？

「姐さん、理解できてる？」

「…とにかく、竜族にちよつかいかけて良いのは、『蒼玉の魔王』だけって事だけは理解できたわ。」

「それさえ理解してりゃ、話は早い。じゃあ、もう1つ問題。ただ今、絶賛絶叫中のダークドラゴンは、『誰の配下』にこんな体になれた？」

…ディールの話を鵜呑みにするなら、後ろでひたすら、「殺してくれ」と嘆願している相手をこんな風に変えたのは…彼が見たという、「黄玉の魔王」の部下であるデビルだけ、と言う事になる。

「…成程、それで『協定違反』って訳ね。」

「本当に、『黄玉の魔王』の配下がやったと言うのなら…と言う条件がつくけどな。」

私の言葉に付け足しつつ、ダルも納得したように頷いた。

まあ、ダルの言葉には激しく同意するけどね。何しろ教えてくれている相手が、魔王な訳だし。ディールが嘘を吐いている可能性だってありうる。

もつとも、この場で嘘をつく理由も、見当たらないっちゃ見当たらないのだけど。

「さ、それじゃあルフイ姐さん。ぱぱーつとあのドラゴン、殺しちゃってよ。俺が殺してもいいんだけど、それじゃ後々面倒臭い事になるから。」

まるで話はここまでと言わんばかりに流れを断ち切り、ディールは、この場には不釣り合いな程にこやかな笑みを私に向け、まるで現状を楽しんでいるかのように言葉を放つ。

「それ程までに、この「魔王の分身」は、私の混沌魔法を見たいのだろうか。」

意味が分からない。あの魔法の、何にそんなに期待しているのか。殺して……くれええ……」

後ろから聞こえる、涙混じりの竜の声。

「魔王の手にかかるくらいなら……どうか、殺してやって下さい、ルフイ様。」

目の前では、深々と頭を下げて頼み込む次期竜王。

「報酬の出ない仕事はしたくないし、混沌魔法を使うのも、正直物凄く疲れるから嫌なんだけど……」

「放つとしても、面倒な事になるだけ、よね。」

溜息混じりに私は小さく呟くと、くるりと後ろを振り返って、虚ろな瞳の漆黒の竜に向かいなおす。

「その命を、断つために。」

「……ヘルゲートソード。」

剣が、私の声に応える様に小さく振動する。同時に、その漆黒の刀身は、淡い赤色の光を放つ。

以前のディールと戦った時には、「魔王ですら引き出せない力」と言われたのを覚えている。良くは分からないが、そうそう滅多に使えるものでも無いらしい。

破滅を呼ぶにとしては、妙に優しい光を纏ったその剣を、私は無表情に振り上げる。

そして……剣先が、相手の首に軽く入った瞬間。

「ありがと……人間よ。」

「……っ!!」

ようやく苦痛から解放されたらしい漆黒の竜は、最後の瞬間にそう呟き……その次の瞬間には、その首は胴から離れ、大地に落ちる前に光となって空気に溶ける。

…死ねぬ者となった彼には、その亡骸も、残す事が許されないのだろうか。

私よりも一足先に「死」を得た「不死者」は、まるで最初からいなかったかのように、消えてしまった…。

第7章：不死、変人、って誰の事よ！？

……体が、だるい。

混沌魔法を使うと、いつもこうなのよね。何て言うの？こう…全身の力を奪われたような感じ？

一応不死者…「死なず」特有の回復力の速さで、戦える程度には体力は回復してるけど…これ、もしも普通の人間の体だったなら、どうなっていた事やら。

確かデイルは、「普通の人間なら、命と引き換えになる代物」と言う言い方をしていたから…あの魔法を使う事自体、「一回死亡」って事になるのだろう。

「大丈夫かルフイ？顔色が悪いが…」

「あー…そうね、ちよつと体がだるいだけ。戦闘に支障は無いと思うけど、いつものように…って訳にも行かない程度には具合悪いわ。」

「

正直に現状をダルに報告しつつ、私はちらりと自分の後ろ…デイルへと目を向けた。

楽しそうな表情を浮かべた、一介の「少年戦士」。傍から見るとそうとしか見えない辺りが、非常に恐ろしい。

一応今の時点では殺気やら敵意やらは感じられないから、大丈夫だろうけど…こいつが本当に敵に回るような事があれば、悪いけれど私は即座に逃げる。

もう2度とあんな危険この上ない戦いはしたくない。

「ところでデイル。」

「何、ダル兄さん？」

「君、本当について来てるんだな。大丈夫なのか、こんな…言ってしまうば、敵地のだ真ん中で。」

ダルが心底心配そうに、デイルに向かって声をかける。

あんだ…いい奴だけど、相手は曲がりなりにも魔王の分身よ？心

配するべきは自分達の方じゃない？

心の中でツツコミを入れつつ、私はもう一度デイルの方へと視線を移す。

彼は…一瞬だけ、きょとんとした表情になり…すぐににこやかな…いっそ清々しいまでの笑顔になると、裏なんて一切無さそうな声できっぱりと言い放つ。

「勿論。ルフィ姐さんとダル兄さん程、面白い存在は無いもん。それに、俺が魔王の分身だって知ってるの、ここにいるメンバーだけだろ？大丈夫だって。」

「僕が仲間に話さない…そんな確証でもあるのか？」

「確証はねーけど…少なくとも、今のアンタは『黄玉』の部下を追う事の方が先決のはずだ。俺に構ってる暇は無い…そうだろ？」

どこか忌々しげに吐き捨てるラギスに対し、デイルはからからと笑いながら言葉を返してくる。

例え自分の正体をばらされても、敗北しない絶対の自信があるのだろうか。

それとも…単純に、本当に現状を楽しんでいるだけ？

…魔王の考える事って、正直わかんない。いや、わかっててもそれはそれで困るような気もするんだけど。

しかも、「面白い存在」って何？

「何か私、変人認定された気分だわ。」

「魔王に認められた人間なんて、そうそういないよなあ。ましてルフィ姐さんの場合、混沌魔法が使える。この魔法は、俺達魔王や、神々ですら使えないモンだ。…使えるのは、世界を造った存在と、それに近い者だけだ。」

「…ごめん、意味わかんない。」

そう言えば、以前戦った「デイル」も言っていた事だけど…「混沌魔法」の力を引き出す事は、魔王も出来ないらしい。

魔王も神も扱えない魔法を、不死者とは言え仮にも人間であるはずの私が扱えるって事に、ひどく驚いていたっけ。

ただ…現時点で、私に分かるのはそれだけなんだけど。その後の、「世界を造った存在」とか、「それに近い者」とか、正直……わからない。

そんな私の疑問を感じ取ったのか、ラギスはこくりと1つ頷き、言葉を紡ぎはじめた。

「混沌魔法と呼ばれる魔法は、相手を完全に無にすると同時に、無から何かを作る事も出来る魔法なんです。神々ですら0から1は作れません。」

「魔王だって、完全に1を0に返す事は出来ない。それが出来るのは、俺達を作った最上神…『世界を造りし者』だけだ。ルフィ姐さんの場合、不死者って事もプラスに働いてるんだろぅが…」

「恐らくは、『観察者』の血筋に当たるのだと思います。」

……えーっと？ラギスとデイルの間ではこの会話が成立してるんだろぅけど…張本人である私には何が何やらさっぱりなんですけど。

しつこいようだけど、神も魔王も扱えない魔法だって事は分かったわよ。でもその先。神や魔王より更に上の存在？「観察者」？

あ、頭から湯気が出そう…

「……ダル。」

「何だ？」

「この、神話に疎い私にも、分かるように簡潔に説明して。」

救いを求めるように私はそう頼むと、ダルは軽く唸り…

「そうだなあ……要はルフィが、生まれつき他人とは違う存在…変人だったって事じゃないか？」

「殺す。」

「簡単に言えって言ったのは君だろ！？」

「それでも変人って何よ！？」

結局こいつもわかってなかったのかい！

とか思った、その瞬間。

嫌な予感がぞわりと私の背を駆け抜け、反射的に私はダルの襟首

を引っ掴んで大きく前へと飛んでその場を離れる。

次の瞬間には、爆発音と共に、私達のいた場所の地面が大きく爆ぜた。

「な…何だ!？」

「爆発!？」

…そうだ、ラギスとディール!

「無事!？」

「かわしました!」

「生きてるぜ!」

端的な私の問いに、土煙の向こうから2人の声が響く。生きてるなら良し!

思いつつも、私は真っ直ぐに爆発の中心…その殺気の主を睨みつけるようにしながら見つめる。

…見た目は、黄色い毛色の犬のようなものだ。ただし、普通の犬とは異なり額にも目があるだけでなく、耳の脇の部分から捻れ曲がった3本の角が生えている。

「悪魔…だな。」

「…ディール、アンタ確か、『黄玉の魔王』の配下のデビルを見たとか言ってたわね。」

いつの間に隣に立ったのか、真剣そのものの表情で拳を構えるディールに、私も剣を抜き払い目の前の犬もどきを見据えて問う。

私の聞きたい事を察知したのか、ディールは軽く首を横に振ると…
「いいや。俺が見た奴とは違う。あの犬は…そのデビルの置き土産だろうな。」

「成程。よっぽど私達に邪魔されたくないみたいね。」

私の言葉に応えるように、周囲からは大量の「黄色い犬」…そのどれもが、こちらに向けてとてつもない殺気を振りまき、今にも私達を噛み砕かんと唸り声を上げている。

久々に…楽しくなってきたかも。

ぞくぞくする程の殺気の中、私は呑気にも、そんな事を思い…そ

の剣を、振るっていた…

第8章：黄犬、悪魔、余裕の戦闘？

「キエロ…フシシャ！」

リーダー格らしき「犬」が喋ったかと思うと、犬にはありえない脚力でこちらに向かって飛び掛る。

口からむき出した牙を、私に突き立てるべく。

だが甘い！

私は抜き払っていた剣を横に薙ぎ、その牙を叩き折ると同時に、その勢いのまま相手の体を吹き飛ばす。

こつちだつて、今まで悪魔相手に戦い抜いてるのよ！中には人型とか悪魔の上位に位置するデビルとかも相手にしてるの！

「『ギンパツノ アクマ』ノ イミヨウ…ダデデハ ナイナ。」

「『銀髪の悪魔』って呼ばないでくれませんか！？私、その呼び名が何より嫌いなんです！」

悪魔の言葉に僅かに苛立ちながらも、私はゆっくりと相手との距離を測る。

ラギス、ディール、ダルは3人は、各々他の「黄色い犬」を相手にしているようだし、早めに決着つけて加勢に行った方が良くかもしれない。

ディールはまだ良い。アイツは曲がりなりにも魔王の分身、この程度の悪魔相手に、負けるとは思えない。

問題はラギスとダルだ。

ダルは神官と言う職業上、あまり戦闘には向いていない。魔法を使うにしろ、僅かな詠唱時間と言うものが必要になるが…今の「犬」の動きから考えると、その詠唱時間を与えてくれるとは思えない。

そしてラギス。あれは別の意味で心配だ。

何しろ、デビルを倒すために城の塔を1つ壊滅させた前科がある。悪魔殲滅のためなら、多分、手段を選ばないだろう。それじゃ流石にまずい。

ラギスの事だ、下手をすると魔王の分身であるデイルごと悪魔達を倒しかねない。そして、「巻き込んだじゃいました、テヘ」とか言ってるやむやにするだろう。

…悲しいかな、その様子が容易に想像できてしまう。

「カンガエゴトトハ ヨユウダナ！」

おっとしまった、今はとにかく、目の前の敵に集中しないと！

飛び掛り、襲い来る犬達を次々に薙ぎ、一匹、また一匹と悪魔達を黒い霧へと還していく。

「質より量…そういう考えで私達を倒す気だったのであれば、それは過ちだと言う事、教えて差し上げます。」

「シツモ リヨウモ ソロエタツモリダ。キサマコソ ワレラヲ アマクミルナ。」

……質も量も揃えた…？

訝るより先に、体の方が動く。多方向から同時に襲い掛かる犬達を、その場でぐるりと回りながら叩き切る。

さっきまでとそう変わらない実力…そう思っていたんだけど……

2つに割った犬の体が、見る間に再生していく。しかも、割った分だけ増えている。

うわあおう。成程、分裂してくる訳ね。ってさっき叩き斬った奴、普通に霧になったじゃないの！？

「サキホドマデノハ タダノ ステイシ。」

捨石って。

苦笑混じりに思いつつも、私はリーダーらしき犬を真っ直ぐに睨みつける。私に斬られ、それ故に数を増やした犬達がぐるりと囲んでおり、リーダー格の犬はその人垣…と言うか「犬垣」の向こうで、ニヤニヤと牙を失くした口で笑っている。

うん、見た目に情けない。

こう言う時の定石は、トップを叩く事にあるんだけど……そう簡単には通してくれそうに無い、か。

「イケ！」

って考えてる最中に号令！？

リーダーの命令の元、囲んでいた黄犬達が一斉にこちらに向かって襲い掛かる。

人間ならおそよ死ねる部位：急所とも言つべき箇所に向かって、その角を、牙を突き立てるべく突進するが：甘い！

真っ直ぐに急所を狙ってくるのは、確かに正しいかもしれない。並の人間ならば、間違いなく死ぬだろう。

しかし：残念ながら、私とてそれなりの場数を踏んでいる傭兵。軽く上へと飛び上がる事で、犬の突進を回避する。

目標を見失った獣達は、互いにその角をぶつけ、噛み付きあい、やがて地面に転がりその場でのた打ち回る。

よし、狙い通りの相打ち！それを確認すると、私は下で群れる獣の体を踏みつけ、そのままリーダー格の歯抜け犬に向かって駆け抜ける。

うつ：足場が悪い！何か動物愛護団体からクレーム来そうな光景だけど、流石に相手が悪魔じゃそうも言ってられないし。

「ナニ……！？」

「こつちも場数、踏んでるんです！」

慌てて飛び退く黄犬。だが、遅い！

私の剣は相手の喉を捕らえ、突撃した勢いのまま刃先をずぶずぶと沈める。

私の剣は、ダル曰く、かなり強力な魔剣。通常の剣ならば悪魔に傷すらつけられないが、この剣はいとも容易く悪魔を切り裂く事が出来る。

：いや、まあ、ヘルゲート・ソードに耐えられるって時点で、普通の剣じゃないんだけど。

「ギャウン！」

「申し訳ないけれど：消えて下さいね？」

ジタバタともがく相手など、全く気にも留めず、にっこりと笑いながら無慈悲な宣言を送る。それを聞いた相手は悔しげに一声吠え

……そのまま、黒い靄へと還っていった。

同時に、周囲を囲んでいた犬達も、途端に苦しみだして見慣れた靄へとその姿を変える。

実体を保てなくなった悪魔の、なれの果てだ。

「どうやら、何とかなったかしら？」

「お疲れ、ルフィ姐さん。いや、相変わらず見事な剣さばき。惚れ惚れしちゃうね。」

「流石です、ルフィ様！これ以上増えるようだったら、僕、竜の息吹を使って一掃しようかと思ってました！」

デイルとラギスが、にこやかな笑顔を向けながら、余裕気な表情で声をかけてくる。

……やっぱりラギス、あんたは物騒だわ。本当にそんなんで竜王になれるのかしら……？

……って、ダルは！？

唯一声をかけて来なかった男を捜し、きよろきよろと周囲を見回すと……居た。

肩で息をし、片膝を大地につけながら、既に消え去った犬達の痕跡を睨みつける青き神官の姿が。

「無事……じゃなさそうね……」

「いや、大丈夫だ。避けまくるのに体力を使っただけで。」

軽く笑いながら、茶化すようにダルは言う。確かに、本人はボロボロのようにも見えるが……服には破れどころか解れも無いようだし、相手の攻撃は貰っていないらしい。

多分、本人の言葉通り……体力がついて行かなかったのだろう。

「全く……なさけない。」

「面目ない。」

まあ……無事なら良いけど。

そう胸を撫で下ろす私の笑みに気付いたのか、ダルも少しだけその口の端に笑みを浮かべ……その瞬間だった。

私達の背後……ロンジユの、街のある方で、大きな爆発が起こっ

たの
は
…。

第9章：撃墜、一对、王達の鉄槌

爆音に気付き、慌てて戻った私達を迎えたのは…街を焼かれ、逃げ惑う人々の姿だった。

…竜の姿で逃げ回る彼らを、「人々」表現する事が正しいのかは分からないが。

「消化班！早く火を消せ！」

「救助班、何をしている！中には幼い子供がいるんだぞ！」

「痛い…痛い…！」

「お母様あ、お父様あっ！どこ？」

怒号、悲鳴、泣き声。全てが混じり、美しかった街はもはや見る影も無い。

「そんな…ロンジュが、僕の故郷が…！」

最初は呆然と。しかし徐々に怒りがこみ上げてきたのか、ラギスは拳をわななかせながら奥歯をギリリと鳴らして呟き、周囲の消火活動の手助けへと向かう。

ダルも、機嫌悪そうにその綺麗な顔を歪め、口の中で呪文を唱え始めている。

…恐らく…水を呼ぶ魔法だろう。

この状況、魔王であるディールの目には、さぞ愉快的な光景に映っているだろうな…

そう思い、今度は視線をダルからディールに移した瞬間。私の背に、今までに無い程冷たい…悪寒とか、殺気とか、恐怖とか、そんな言葉では生温い位の「何か」が走った。

…怒っている。それも、本気で。魔王なのに、何故…？

「『黄玉』の奴…ふざけた真似しやがって……」

「あんた、魔王の癖に…怒ってるの？」

「当たり前だ。」

恐る恐る聞いた私に、ディールは低く、そして短く答える。

…声だけで、充分に人を殺せるのでは無いかと思えるほど、彼の声は冷たく、尖っていた。

「何でか、聞いて良い？」

「竜をいびつて良いのは『蒼玉』だけ。その戒律を破ったつてのも大きな理由だけど…それ以上に、俺達『魔王』が望むのは、世界の混乱であつて虐殺じゃない。ヤツのやつた事は、ただの虐殺だ。混乱なんて言う、生易しいものじゃない！」

怒鳴るように言いながら、ディールの覇気…いや、怒気が、周囲の炎を吹き飛ばす。

同時にダルの呪文も完成したらしい。彼の周囲をぶわりと水が取り巻いたかと思うと、何匹もの水の「蛇」になり、ディールが散らした炎を飲み込んでいく。

これで大部分の炎が消えたのだけど…

「痛い…痛い痛い！」

「死なせてくれえっ！殺してくれえっ！」

燃え盛っていた炎の中心にいたらしい竜…しかも、よりによって私達をこの件に巻き込んだ張本人である古竜族のじーさん達数名が、か細い声で懇願している。

体の半分は、既に炭化している残っている部分も、相当深い火傷を負っている。そうであるにもかかわらず、彼らはまだ、「生きていた。」

ある者に至つては、首から下が無く、ある物は逆に首が完全に炭化していると言うのに。

「…死ねない、不死者…っ！？」

それは、先程私が「殺した」黒い竜と同じ…「死ねず」と呼ばれる者と化した竜達。しかも、1人2人などと言う可愛い数では無い。恐らく、数十人単位で存在している。

「そんな…やっぱり、デビルが…！？」

「…だろうな。畜生、ふざけやがって。殺すだけじゃ飽き足りねえ…！」

「悪いが、それは僕の台詞だ、ディール。ここは、僕が守るべき街だったのに……許せない……！」

その瞳に怒りの炎を宿し、ラギスは真っ直ぐにある一点……先程私が見た、「首から下の無い竜」を睨みつけた、その瞬間。ラギスはその生首に向かって「竜の息吹」と呼ばれる攻撃を躊躇無くぶちかます。

ちよっ……そいつ、被害者なんじゃないの！？

「何やって……」

「ルフィ様、あいつ……デビルです！」

「何ですって？」

さらりと言われた物の、その確信に満ちた声を信じて先程の「首だけ」を見やる。すると……その首の形が、丁度変わる所だった。

ぐにやりと、まるでスライムのように伸び縮みし、徐々に「竜の首」から、見覚えのある血色の眼の異形へと姿を変えた。顔は人間と同じだ。白目部分が血色で、金の瞳、菱形の瞳孔を持つてはいるけれど。

ただ、首から下は……様々な種類の竜を集めたかのような、ちぐはぐな印象。背中の翼は漆黒、右腕は青、左腕は純白、右足は赤く、左足は古竜族特有の水かきのようなものがある。極めつけに体の色は、黄金と言うのだから、悪趣味極まりない。

うん、普通にセンスが無い。

「何故、分かった？」

「……ロンジュの住人の顔は、全部覚えている。知らない顔だったから、攻撃した。」

……成程、伊達や酔狂で「次期竜王」の肩書きを持っている訳じゃ無かったって事ね。

それにしても……随分と悲惨な事をしてくれる。そりゃあ、悪魔やデビルとして、正しいあり方なのかもしれないけれど……

「何のために、このロンジュを狙ったのか……聞いて良いかしら？」

今にも相手に飛び掛らんとしているラギスとディールよりも、半

歩だけ前に出て、私は出来るだけ厳しい声を作って問いかける。

…街が焼け落ちる所など、この2000年で何度も見てきた。私が人間だった頃だって、国同士の争いで火の海と化した街を見た事だってある。

だけど……ここまで凄惨な光景は、初めてだ。何しろ、死ねない者達が、その場を這いまわり、まともな体の持ち主達に、殺してくれと懇願している。

助けてくれと言う悲鳴は、何度も聞いたし言わせてきた。私は傭兵だ。人間を相手取り、無慈悲に殺してきた事だってある。だが、これは…殺すよりも、残酷だ。命を弄んでいる。

「『黄玉の魔王』様の命令でもあり、契約でもある。」

「契約……？」

「聞いた事がある。高位の召喚士に召喚されたデビルやエンジェルは、召喚士との間に契約を交わし、それを元に行動する、と。」

分からず呟いた私の言葉を聞きとめたらしく、ダルは錫杖を構えながら説明してくれる。

…つまり、本当の黒幕は、その「召喚士」って事ね。何となく分かったけど…

「不死の研究の手伝いだ。今回はその実験の成果の確認だが…やはり、また失敗か。いやいや残念。」

殺してくれと哀願する竜を、喜悦を含んだ目で見ながら、デビルはさしてがっかりした様子も無く言い放った。

……不死の研究。その成果を確認するには、不死にしたはずの相手を殺せば良い。

その実験を、このデビルは竜相手にやってのけたと言う事か。

…そんな馬鹿な。いくらデビルとは言え、全員では無いにしろ、古竜族複数人を相手に、簡単に呪いをかけられたはずが無い。

「しかし、いい悲鳴だ。竜族を弄なぶると言うのも、そう経験できる事では無い。」

「…つまり、お前は自分の趣味も兼ねて、こんな大惨事を引き起こ

した、と？」

「まあ、そうなるな。しかし、何が悪い？我々『黄玉の魔王』の配下は、地上を混乱させるべく生まれた物だ。当然だろう？」

「貴様……その口を閉じる。」

恍惚の表情を浮かべたデビルに、低い声でラギスは呟いた。その隣では、デイルがこれ以上無いくらいにこやかな笑顔を浮かべている。

ううわ。2人とも、すっごく怒ってるし。

と思うや否や、彼らは同時に動いた。早さも、タイミングも全く同じ。似てない双子なんじゃないかと思うくらいに息ピッタリの動きで、ラギスは右、デイルは左から、相手を挟み込むようにして魔力を込めたキックを放つ。

その勢いに、デビルは驚きの声を上げる間もなく軽く後ろへと吹き飛んでいく。

……勢いを殺したような飛び方じゃない。純粹に、まともに、全力で喰らってしまった吹っ飛び方だ。

思わず柄にかけていた手を下ろし、呆然としてしまう私。

良かった。私が戦った時に、あんなキックがまされなくて。

「ぐ……うつ！？」

「立あてえよお。立って、お前の悲鳴を聞かせろよお……」

「まだだ……まだ、この街の苦しみの、万分の一も味あわせていないぞ……！」

よろりと立ち上がるデビルの前に、悠然と立ちながら。2人の「王」は、片や邪悪な笑みを、片や鮮烈な怒りを見せて、デビルが立ち上がるのを待つ。

そして、立ち上がったのを確認すると、今度はその顔面目掛けて拳を叩き込んだ。

「……私、出る幕無いんじゃない？」

「だろうなあ。竜王と魔王のコラボなんて、普通は見られないぞ。」どこか遠い目をしながら、私とダルはボコボコにされるデビルを

見つめる。

まるで現実味が無い。あんな一方的な戦いは、見た事が無い。金色の少年と、真紅の少年が、2人して竜の体を持った変な生き物を殴る蹴るわ吹き飛ばす魔法で焼くわ。

「この状況が『混乱』だあ？生き物がいなくなったら、混乱どころか静寂しか残らねえだろうが！テメーは殺しすぎたんだよ！」

「貴様の趣味で、貴様の自己満足で！この街をここまで壊滅させただと？貴様は、命を何だと思ってるんだ！！」

「まだ足りねえが…もう良い、散れ。」

「お前の存在なんか、認めるもんかー！！」

無慈悲に、感情的に。そう宣言すると、2人は真の姿になって、そのデビルを宙へと放り投げ…

「行くぞデイル！」

「言われるまでもねえよラギス！そっちこそしくじんなよ！」

そんな声が聞こえると同時に、ラギスの「竜の息吹」に乗せた、デイルの赤い羽根型の刃が、相手を微塵に切り刻み…その欠片は大地に触れる直前に、黒い靄へと還って行った。

…それと、同時に。

周囲でただ、殺してくれと哀願していた者達もまた…術者が消滅した事により、ぱたりと、息絶えた。

後に残るは累々と横たわる竜達の亡骸と…上空を、泣いているように旋回する金色の竜と、悔しげに鳴き声を上げる赤い鳥、そして、私とダルだけだった……

最終章：黒幕、閉幕、そして次幕へ

あの悲惨な事件から、一月程経った今日。

私達はまた、旅路に戻っていた。

さすがは絶大な魔力を誇る竜族。復興するのが早い早い。そもそも、「家」の概念が無いので、建物だってそれ程必要にならないと言うのが大きいようだ。

ある程度、町の作りなどの外観面を手伝ったとは言え、私やダルなど殆ど出る幕は無かったし。魔力面、力仕事面なんて、私らがいてもしょうがない。

等と思いながら、私は今回の報酬である魔封石を手の中で弄ぶ。

結局、私をこんな体に変えた奴の名を知っていたであろう存在は、あの騒ぎで死んでしまったみたいだし……何て言うか、骨折り損？ そんな事を考え、深く溜息を吐く私の隣では、ダルが物欲しそうな目でこっち……と言うか、手の中にある魔封石を見ているし、ラギスも、「まだ、僕は世界を知りませんから」とか言ってこの旅についてきている。自分の国を放つといて良いのかと旅に出る前に聞いたら、彼がくつついてくるのは現・竜王の命令なのだそうだ。

それでもって……紅玉の魔王の分身であるデイルも、「面白そうだから」と言うただそれだけの理由で私達の旅にくつついてきている。

「それにしても……何でこう、悪魔絡みの話が私の所に舞い込んでくるのやら。」

ずきずきと痛むこめかみを押さえつつ、答えの出そうに無い問いを口に出す。

本気で迷惑この上ないんですが。お陰で、余計に「銀髪の悪魔」の異名が轟いているじゃない。主に「悪魔を呼ぶ存在」として。

冗談じゃない、こっちだって迷惑しているのだ。人をトラブルメーカーの様に言わないで欲しい。むしろ巻き込まれているのはこっ

ちだっつーのに。

「俺が思うに、ルフィ姐さんは体質的に、魔王に好かれ易いんじゃないか？」

「……私を好いているのは、あんただけよ、デイル。」

「どうやら私の呟きを聞き止めていたらしい。前を歩いていたデイルが、ひよいと私の顔を覗き込みながらそう言った。

「と言うかね、何、「魔王に好かれ易い」って。それはそれで厄介なんですけれど。

「とか思っている私を他所に、デイルはきよとした表情になり……」

「ひよっとして……ルフィ姐さん、自分を『変えた』相手を知らなかったりする？」

「知らないから、知りたいと思つて旅をしているんです。」

「しかし、まさかこの物言い……ひよっとして、デイルは私を変えた存在を知っている！？」

「あ、でも、憶測だから何とも言えない。言えないけど……少なくとも俺、つまり『紅玉の魔王』でない事だけは確かだから。」

「私が問い詰めるよりも先に、デイルは先手を打つように両手を挙げて言葉を返す。

「物言いから察するに、見当は付いているのだろう。見当は付いているが、断定は出来ないと言う事か。せめてヒントだけでも欲しい所だが……どうやら、それ以上私に関して何かを言うつもりは無いらしい。」

「それにしても……結構面白い面子だよな、これ。不死者2人に竜王殿に魔王！」

「……僕はまだ竜王じゃないんだが？」

「何言つてんだよ。俺から見れば、次期竜王も現竜王も変わらねーって。」

「これで神がいたら、ある意味最強だな。」

「……ダル兄さん、それ、マジで洒落にainless……」

「最強と言つか、最凶ですよ。」

呑気に笑って言うダルに、ディールとラギスが冷や汗流しつつ言葉を返す。

どうにもこの2人、先日共同戦線の一件以来、ほんの僅かながら仲良くなっている様だ。基本的には仲が悪いのだが、それは属する物が真逆だというだけで、同じ種類の生き物だったら、双子かと思える程に、考え方が似ている…と思う。

そんな事を2人に言おうものなら、全力で否定されるだろうが。苦笑を浮かべながら思ったその時。自分達に注がれる視線に気が付き、私はずっと足を止める。

……ようやくお出ましか。

「ルフィ様？」

「どうした？」

唐突に足を止めた私を不審に思ったのか、ラギスとダルが不思議そうに問う。唯一ディールだけは、私と同じ物に気付いているらしく、その口元に楽しげな笑みを浮かべていた。

「……まだ何か、用事？……古竜族の長老さん？」

視線の元に向き直り、私は呆れた風な声でそう呼びかける。

そこに立っていたのは、古竜族の数少ない生き残り。そして私に報酬として、魔封石を渡した存在。ただし……その相貌は以前会った時よりも痩せこけている。枯れ木のように、と言っても良いかも知れない。

それなのに、瞳はギラギラと輝いている。……竜族ではありえない、血色に。

その意味に気付いたのか、ラギスがぎょっとしたように目を見開き……そして、悲しそうに首を振った。

恐らく、気付いたのだろう。目の前に立つ竜こそが、今回の黒幕である事に。

「不死の研究は失敗だったんでしょう？契約したデビルも失ったのに、まだやる気ですか？」

「貴様の…貴様ら存在は、儼にとって必要なのだ。完全な不死、完璧な生命！儼の望む永遠を、貴様らは持っている！！」

……………おかしいとは思っていた。

今回、竜の首に化けてたデビルは、「不死の研究成果の確認のために、この街を焼いた」と言っていた。けど、最初に案内されたダークドラゴンや、ラギスみたいな若い連中ならともかく、無駄に長生きして魔力に長けた存在である古竜族が、あの程度のデビルの呪いを、ほいほいと受けたとは思えない。

と言う事は、デビルを手引きした奴がいるだろう。では、それが出来るのは誰か？

デビルを従えてるのだから、無論それは召喚士。しかも、被害に遭った連中と顔が良く存在。そうすると、生き残った古竜族が最も疑わしいのだが…それではまだ、決定打に欠ける。

だから、今まで私は手を出せなかった。

街の復興もあつたし、何より「生き残った古竜族」は彼1人ではなかったからだ。

「やっぱり、あなたが……」

悲しそうに言葉を放ったのは……ラギス。

やっぱりって事は、ラギスはひょっとして、このジーさんを疑ってたって事！？

驚いたように見やる私とダル。感心したように軽く目を見開くデイル。そして特に何の感慨も抱いていないらしい古竜。

それらの視線を受けて、それでもラギスは静かに言葉を綴る。既に魔と化した、先達に向かつて。

「魔力に関しては竜族の中でも随一と謳われる古竜族であるあなたが、あんな大きなサイズの魔封石を持っている事自体、おかしいんです。…僕達が、真逆の性質を持つデビルを召喚しようとする、と、相当な魔力を消費するので、よもやと思っていたんですが……」

「……不死の研究は、竜族にとっては穢れじゃなかったのか？」

シャンと錫杖を構え、ダルがきつく相手を睨みながら問いかける。

彼も、この街に来た際、私程では無いにしろ、散々彼から「穢れた物」と言う扱いを受けている。だからこそ、そんな言葉も出たのだろう。

正直、それは私も言いたいところではあるのだが。

しかし相手は、余裕気に笑うと……ニイ、と口の端を歪める。

その笑い方は……決して竜族の持つ、不敵な印象を持たせる物などではなく……悪意と邪気に裏打ちされた、気味の悪い物だった。

思わずすらりと剣を抜き、こちらも構えてしまう。

恐らく、すでに彼は「竜族」である事を辞めている。聖なる生き物ではなく、魔に属する存在に変わってしまったのだ。その証拠に……彼の醸し出す空気は、重く、澱んでいる。

「儂とて、若い頃はそう思っていた。だが……この年になると、死が怖いのだよ！」

「……不死者の私に言わせれば、『死なない』事の方がよっぽど怖いけどね。」

「それは死なぬ者の論理！貴様らのその体を調べ、私はこの老いて朽ちて行くだけの体から脱却するのだ！」

吠えるように言うと同時に、相手はその姿を竜本来の姿に戻す。

ただ、私の知る古竜族と異なり、悪魔と同じ血色の目に金の瞳。

翼は奇妙な形に振れていた。紺色の鱗の隙間からは、びっしりと黄色い毛が生えている。

それは、いつか見た……黄犬と同じ毛色。

「どつぷりと黄玉のヤローの力に染まっちゃってる。ありゃあ、半デビル化してるな。どーするラギス？あそこまで行くと、流石に俺でも救えないぞ？」

「……あの方は、既に同族殺しに加担した罪を犯している。裁かなきゃ、いけない。」

王として。

小さく呟かれたその声は、果たして何人に届いただろう。ラギスは表情を消し、人の姿のまま、掌に光の球を生み出した。

恐らくは、竜の息吹の人型版。と言う事は、見た目以上の攻撃力……と思っただ方が良いだろう。まあ、「掌」って時点で「息吹」と呼んで良いのかは疑問だけど。

『生きていたいと願う事の、何が罪か！私はただ、実験をしたただけだ！』

「あんなのは、実験じゃないわ。」

「ただの虐殺です！」

私の言葉を継ぐようにしてラギスは言うと、その手に生んだ光球を相手めがけて投げ飛ばす。

同時に私も相手の背後に回りこみ、首筋めがけて剣を振り下ろすが……

『おおおおおっ！』

「！？」

咆哮と共に、剣が見えない何か……光の壁の様な物によって弾かれる。ラギスの放った攻撃も、同じタイミングで生まれた闇によって消されてしまった。

嘘お！それぞれ別の方法で弾いた……！？

「二種の防御魔法を、同時に高速詠唱、発動だと！？」

「な……そんな馬鹿な！？」

デイルとラギスの声が重なる。

私には咆哮としか聞こえなかった声は、2人にとっては違うように聞こえていたらしい。魔王の驚愕つて、結構レア物かも知れないいやいやいや、呑気にそんな事考えてる場合じゃなくてね！

自身にツツコミ入れつつ、私は慌てて2撃目を加える。だが、それもすぐに咆哮と同時に発動したらしい魔法によって弾かれてしまう。

ちいつ、厄介な。

思いつつも、私は一旦相手との距離をとり、もう1度剣を構えなおす。そんな私の後ろに、いつの間にかダルが立っている。

こいつ、今まで何もしないと思ったら、私の後ろで隠れてたのか。

そう思う私に対し、彼はこそつと耳打ちをした。

「ルフィ、もう1回頼む。」

「今まで働かなかった分、何か算段あるんでしょうね？」

「算段と言うか…確認したい事がある。」

成程、もう1度だけ、データを取りたいって事ね。

「『雷』の後に、攻撃を仕掛けてくれ。」

「りょーかい。信じたわよ。」

短く答えたと同時に、ダルの声が響く。

「邪滅迅雷！」

ドン、と白い雷が相手の周囲を囲むようにして落ちるが、それは三度目の咆哮によって生まれた闇に掻き消される。

だが、その事は折込済み。雷の合間を縫うようにして、私は一息に相手に駆け寄り、再び剣先を突き出す。

呪文を発動させた直後なら、多少の隙が出来て攻撃が通るはず！あくまで理論上は！

しかし…どうやら私の考えは甘かったらしい。「高速詠唱」は伊達ではなかった。軽く相手は一声鳴くと、突き出した剣はまたしても光の壁に遮られる。

っだあああっ！やっぱり駄目か！こうなったらやっぱり「ヘルゲートソード」を使うしか無いか！？あれなら無慈悲にさっくり斬れそうだし！！

とは思うものの、やはりそれは最終手段だろう。

等と考えた次の瞬間。シャン、と再びダルの錫杖が鳴る。その先に、闇を纏わせて。

「ファントム・グレイド！」

一旦彼の錫杖に纏わり付いた闇は、その声を合図に一気に膨れ上がると、勢い良くデビル化した古竜の体を貫いた。

その直前に、相手の咆哮が聞こえたにも関わらず、だ。

『ば…馬鹿なっ！？貴様、暗黒魔法を……！？』

「どうやら、自分が予想していていなかった攻撃は打ち消せないよ

うだな。」

ダルは攻撃を食らい、受けた傷から真っ黒な血を流しながら怒鳴る相手に、攻撃した方はフン、と軽く鼻で笑いながらそう言った。……えーっと、つまり？

相手は、こっちの攻撃を予測した上で、防御魔法を繰り出していたと言う事だろうか。

例えば、私相手なら魔剣を防ぐ呪文、神聖魔法やラギスの攻撃ならそれを中和する魔の力と言う様に。恐らく、ディールが攻撃を仕掛けてきたなら、神聖系の防御呪文で防ぐつもりだったのだろう。半デビル化した竜だからこそ出来る業だ。

だが……まさか、神官であるダルが、暗黒魔法を扱うとは思っていなかったのだろう。神聖魔法が来ると思い込んで呪文を放ったのに……やってきたのは真逆の性質を持つ暗黒魔法だった。その為、呪文は作用せずに相手に炸裂した、と言う事なのだろう。

それにしても……ダルの奴、人を目くらましに使いやがったわね！後で絶対にぶん殴る。

「流石ダル兄さん、やるねえ。俺の一部をぶちのめした時と、全く変わらぬナイス卑怯！」

「卑怯でも何でも、今回は勝たないとな。こいつを放置していたら、またどれだけの被害が出るか分らないんだからさ。」

二ヒ、と笑ったディールにそう返すと、ダルも同じ様な笑みを浮かべ……

そして、再び呪文を唱えだす。

『ちいいいいっ！』

どちらの呪文を唱えているのか分らない為か、相手は思い切り舌打ちをすると、またしても防御の為の咆哮を放つ。

恐らくは、どちらの魔法を使われても良い様に。

「もう1回、邪滅迅雷！」

「脇がから空きだぜ？ファウスト・サンダー」

ダルとディールの放つ、二種の雷が相手を襲う。だが、それは防

御呪文によって中和、消滅させられる。

だがそんな物はこちらとて予測済み。数の暴力ではないが、こっちは4人いるのだ。防御の合間を縫い、私とラギスが相手の懐に入る。

「こつちにもいるのよね！」

声をあげ、思い切り相手の喉を突く。どうやら同時詠唱は2つまでが限度のようで、私の剣先はあっさりと相手の喉笛を切り裂き、声にならない悲鳴をあげさせた。

竜の体の構造を詳しく知っている訳では無いが、どうやら私は相手の声帯を傷つけたようだ。ぐっと低い呻きの後、相手の声が詰まる。その隙を突くように、今度はラギスの光線が相手の翼を貫く。

竜とデビルの両方の性質を持ったせいで、普通ならそれほど苦痛にもならないだろうラギスの攻撃も、相当な痛みを伴うらしく、私に喉を貫かれたまま相手は大きくのけぞった。

「ラギス、俺が殺しても良いぜ？」

「いいえ。これは僕がけじめをつけなきゃいけない事だ。だから……これで……終わりにします。」

「あつそ。なら……見届けてやるよ。次期竜王殿の決意って奴を。」
クス、と口の端に笑みを浮かべ、デイルは背中の剣をラギスに差し出す。

刀身の赤い……「紅玉の魔王」専用のはずのその剣を。

「それにお前の力を乗せて斬ってやれ。そうすりゃイチコロだ。」
「お前……」

「勘違いするなよ？奴は竜と魔の力を持ってんだ。だから、同じ様に、竜と魔の力でのめす必要がある。」

お前はどこのツンデレだとツツコミたい。何、今の「別に、あなたの為なんかじゃ無いんだからね！」的なこのノリは何！？

と思わなくも無いが、どうやら当の本人達には関係ないらしい。

真剣な表情でその剣を受け取ると、ラギスはゆっくりと古竜を見やり……

デイルから受け取った剣が、金色の光を纏う。それは恐らく黄金竜であるラギスの力。それに応える様に、剣そのものからも赤黒い光の糸が紡ぎだされた。

互いが織り合わさり、その結果、何とも言えない色の輝きが、辺りの空気を染め上げた。

……なんて綺麗で……禍々しい光であることが。

ぞわりと肌が粟立つのを感じながらも、私は相手の喉に刺していた剣を引き抜き、今一度大きくその喉笛を掻き切る。刹那の後、ダルの暗黒魔法が、ダメ押しといわんばかりに私の作った傷口を焼いた。

人間の可聴域を超える高さで絶叫しているのか、びりびりと空気が震える。

だが、それすらも……次の瞬間には止んでいた。

ラギスの持つ剣が、相手の心臓を捕えた事で。

「あなたの気持ちは、分らない訳じゃない。僕だって、死は怖い。」
震える声で、そして涙で濡れた瞳で。ラギスはしっかりと相手の顔を見ながら、声を紡ぐ。

「でも……終わらない事の方が、もっと怖いと言う事を、僕は以前、ルフィ様に教えてもらった。」

「終わる事ってのは悲しいし寂しいだろうけどな。けど、それが必然だ。」

金の鱗を持つ竜の言葉を継ぐように、赤い羽根の魔王もまた、どこか寂しそうに呟く。

それを聞いて、何を思ったのだろう。古竜は最後に……笑ったように見えた。だけどそれを確かめる間もないまま、彼は悪魔同様、霧となって消えてしまった。

悪魔の最期と違うのは……霧の色が、黒ではなく紫紺だった事と、霧の中から放たれた一条の光。

こうして、1人の古竜の、「死への恐怖」から始まった不死の物語は、幕を閉じたのである。

「あつ、ルフィ姐さん。俺、行きたい所があるんだけど！」

「……どこ？」

全てが終わり、当てもない旅を再開直後。ディールが思い出したように声を上げた。

ディールの行きたい所……どうしよう、物凄く嫌な予感しかしないんだけど。

そう思うのは私だけでは無いらしく、ラギスやダルも胡散臭そうな顔でディールの方を見やる。しかし見られている方はあまり何も感じないらしく、悪戯っぽい笑みを浮かべ……

「『蒼玉』ンとこ。今回の『黄玉』の暴走を伝えねーといけないんだ。」

「はあ！？お前1人で行けよ、僕達……と言つか、ルフィ様やダル様を巻き込むな。」

「えー、何だよラギス、ノリが悪いなあ。あの女、名前ただけだぜ？『魔王』なんて。」

思い切り抗議の声を上げたラギスに対し、ディールの方はウリウリと肘で彼を突きながらそんな事を言う。

本気でこの2人、何だかんだで仲が良いのよね。悪友って奴？

「そう言えば聞かないな、『華麗の神』と『蒼玉の魔王』の戦いの話は。」

「だってあいつら仲いいもん。だから、割と平和的に……終わると思いたい。」

「何、その希望的観測！？これ以上悪魔関係の厄介事は勘弁だからね！」

心の底からのツツコミを入れながらも、何だかんだで私達はディールの言う「蒼玉の魔王」と「華麗の神」がいると言う街……沿岸都市であるブリュ・シティへと向かうのであった……。

最終章：黒幕、閉幕、そして次幕へ（後書き）

拝啓、当作品にお付き合い下さいました皆様方。

この度は最後までお付き合いいただきました事、誠にありがとうございます。

二次創作に現を抜かした結果、更新がこのようなになりました。

……って、また次回に続く的な終わりですか、私！？

しかし……次の「赤翼の魔王」は、今現在抱えている連載を綺麗に処理してから……という形になるかと存じます。

しかしいい加減核心に迫らないとね、と自分を鼓舞する毎日です。

最後になりましたが、本当にここまでお付き合い頂きました事、感謝に絶えません。

それでは、本日はこれにて失礼致します。

西暦2010年9月15日（十五夜？）

辰巳結愛

敬具

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014i/>

金鱗の竜王

2010年10月8日12時55分発行